

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 特 許 公 報(B2)

(11) 特許番号

特許第3813855号
(P3813855)

(45) 発行日 平成18年8月23日(2006.8.23)

(24) 登録日 平成18年6月9日(2006.6.9)

(51) Int. Cl.

F I

B 6 5 D 5/50 (2006.01)

B 6 5 D 5/50

B

B 6 5 D 5/42 (2006.01)

B 6 5 D 5/50

Z

B 6 5 D 77/26 (2006.01)

B 6 5 D 5/42

B

B 6 5 D 77/26

Q

請求項の数 2 (全 6 頁)

(21) 出願番号 特願2001-321113 (P2001-321113)
 (22) 出願日 平成13年10月18日(2001.10.18)
 (65) 公開番号 特開2003-128047 (P2003-128047A)
 (43) 公開日 平成15年5月8日(2003.5.8)
 審査請求日 平成15年6月12日(2003.6.12)

(73) 特許権者 396000846
 株式会社斎藤紙店
 宮城県仙台市若林区連坊小路63
 (74) 代理人 100080148
 弁理士 佐竹 良明
 (72) 発明者 斎藤 富夫
 宮城県仙台市若林区連坊小路63 株式会
 社斎藤紙店内
 審査官 柳田 利夫

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 包装用緩衝箱

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項1】

上から差し込んだ箱状の荷物がその頭部を上突き出した状態で収まる箱であって、角筒状の箱本体から上と下に延設されているフラップをそれぞれ内側に折り込んで、箱本体内面の上縁部と下縁部に連続するボックス形断面の緩衝部を形成し、該フラップにあらかじめ切り込んであって、下側の緩衝部の対向面に全高さに渡ってあらわれる上下方向のスリットに、高さが下側緩衝部より小さい梁を、両端を挿入するようにして支持し、この梁で箱状荷物の底面を支えるようにした包装用緩衝箱。

【請求項2】

箱本体の背中合わせの2面にほぼU字形に切れ目を入れ、これら切れ目に沿って切り出した2本のベルトを立ち上げて荷物の頭部を押さえるようにした請求項1に記載の包装用緩衝箱。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

この発明は、瓶等こわれものを詰めた化粧箱を輸送中の落下事故から保護するための緩衝箱に関する。

【0002】

【従来の技術】

酒を宅配便などで消費者に直送する場合、瓶のまま送るより、瓶を化粧箱に入れて送るほ

10

20

うが喜ばれる。化粧箱に入れて酒瓶を送る場合、輸送中に瓶が破損しないよう従来は、化粧箱を頑丈な外箱に入れ、化粧箱と外箱の隙間には緩衝材を詰めていた。このように、外箱と緩衝材が必要なので、資材費が嵩み、手間もかかった。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】

この発明は、箱状の荷物を輸送中の損傷から守るために、安価で梱包に手間がかからない緩衝箱を提供することを課題とする。

【0004】

【課題を解決するための手段】

この包装用緩衝箱は、箱状の荷物を上から受け入れるものであって、箱本体から延設されているフラップをそれぞれ内側に折り込んで、箱状荷物が当接するボックス形の緩衝部を形成する。下のフラップにあらかじめ形成してあって、下側の緩衝部の対向面にあらわれる上下方向のスリットに、両端を挿入するようにして梁を支持し、この梁で箱状荷物を支えるようにする（請求項1）。

10

【0005】

このように構成した緩衝箱では、垂直方向の衝撃は梁が、横方向の衝撃はボックス型の緩衝部がそれぞれ変形して衝撃を緩和することができ、この緩衝箱に箱状の荷物を入れて輸送すれば、輸送中誤って落としても破損しにくいという効果がある。また、この緩衝箱は、部品が箱本体と梁だけであって、部品点数が少なく安価に提供でき、組立も容易である。なお、梁は、ダンボール紙を折り重ねて用いることができる。

20

【0006】

箱本体から荷物が抜け出ないように固定する必要があるが、これには粘着テープを用いるのが簡単である。しかし、粘着テープを剥がすときに、箱状荷物の印刷面（化粧面）を傷つけるおそれがある。そこで、荷物の頂部を抑えるためのベルトを箱本体から切り出せるよう、箱本体に上下方向の切れ目を設けるよい。切り出したベルトの先端同士を粘着テープで結合すれば、荷物が飛び出すことがなく、粘着テープは荷物に直接張らないので、印刷面を損なうことがない。

【0007】

【発明の実施の形態】

この緩衝箱10は図1に斜視図で示すよう、1.8リットルの酒瓶11が2本入った化粧箱12を上から挿入できる大きさにできている。緩衝箱は化粧箱に比べて高さが小さく、化粧箱の全部が中に収まるのではなく、全高の約10分の7だけが収まる。緩衝箱は底板がなく、梁13で化粧箱の重量を支えるようになっている。

30

【0008】

緩衝箱10はダンボール紙製であり、図2に展開状態を示す。筒状の箱本体18を形成する側面16、主面15、側面16、主面15が順に連なっており、さらに結合用の糊付け片17が延設されている。箱本体18の上下方向にフラップ15a、16aが延びている。主面15から下に延びるフラップには、スリット（細長い穴）25が切つてある。主面15の上部にはUの字形の切れ目19（連続したものでも断続したミシン目でもよい。）が設けてある。

40

【0009】

組立は、角筒状の箱本体18を形成した後、上下の各フラップ15a、16aを折り線20に沿って内側に内側へと折り込んで、ボックス形の緩衝部21を形成する（図3、図4）。

【0010】

なお、上下の側面フラップ16aは両側に小さな耳22が突出している。上下の主面フラップ15aは、途中から幅が狭くなっており、これを内側に折り込むと、図3に示すように、ノッチ23があらわれるので、側面フラップ16aを折り込んだら、耳22をこのノッチに係合させるようにする。こうすることで、ボックス形緩衝部21がめくり上がって来ることがない。

50

【 0 0 1 1 】

下に延びる主面フラップ 1 5 a の各々には、2 条のスリット 2 5 が形成してあり、図 3 に示すように、これらスリットに、ダンボール紙を三つ折にして形成した梁 1 3 を挿入する。下側の主面フラップ 1 5 a の先端には、図 2 に示すように、付加部 2 6 を延設してあり、こうすることで、図 4 に示すように、梁 1 3 の下端を支えるダンボールが 2 枚重ねになり、梁 1 3 をしっかり支えられるようになっている。

【 0 0 1 2 】

使用するときは、図 5 に示すよう、瓶の入った化粧箱 1 2 をこの緩衝箱 1 0 に挿入する。次いで、切れ目 1 9 で周りを囲まれた部分からベルト 2 7 を切り出し、化粧箱 1 2 の上で 2 本のベルトの先端同士を重ね合わせ、粘着テープ 2 9 で繋いで、化粧箱が抜け出ないよ

10

【 0 0 1 3 】

このように化粧箱を緩衝箱に入れて輸送すれば、誤って落としても、緩衝箱が衝撃を吸収して破瓶事故を防ぐことができる。なお、化粧箱の中で瓶同士が衝突して破損するのを防止するため、瓶と瓶の間にダンボール紙を挿入しておくといよい。

【図面の簡単な説明】

【図 1】 緩衝箱の斜視図である。

【図 2】 緩衝箱の展開図である。

【図 3】 組立途中の斜視図である。

【図 4】 緩衝箱の中央断面図である。

20

【図 5】 緩衝箱の使用状態を示す斜視図である。

【符号の説明】

1 0 緩衝箱

1 1 瓶

1 2 化粧箱

1 3 梁

1 5 a 主面フラップ

1 6 a 側面フラップ

1 8 箱本体

1 9 切れ目

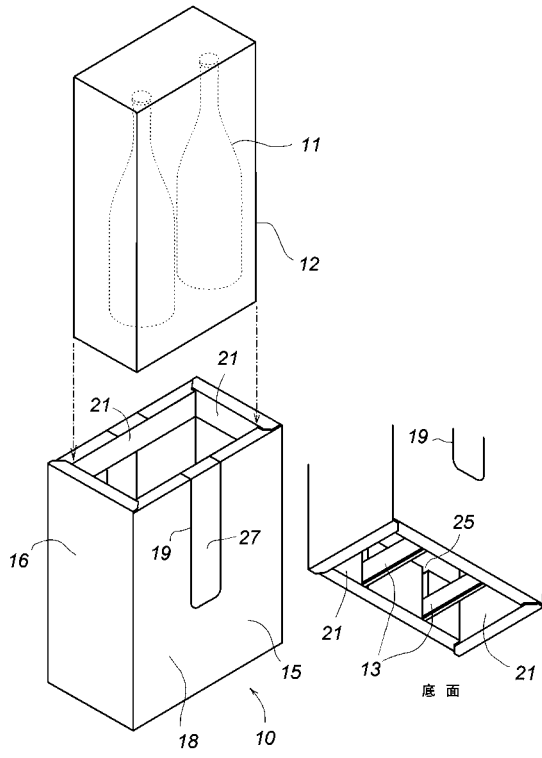
30

2 1 緩衝部

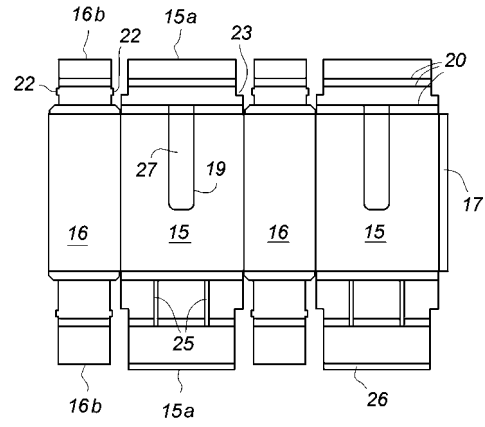
2 5 スリット

2 7 ベルト

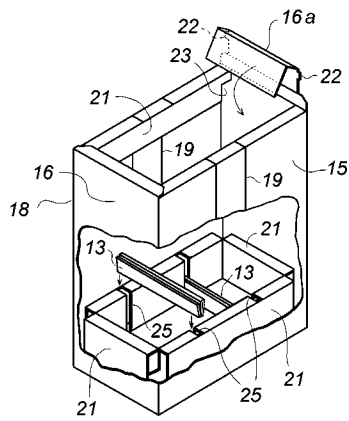
【図 1】



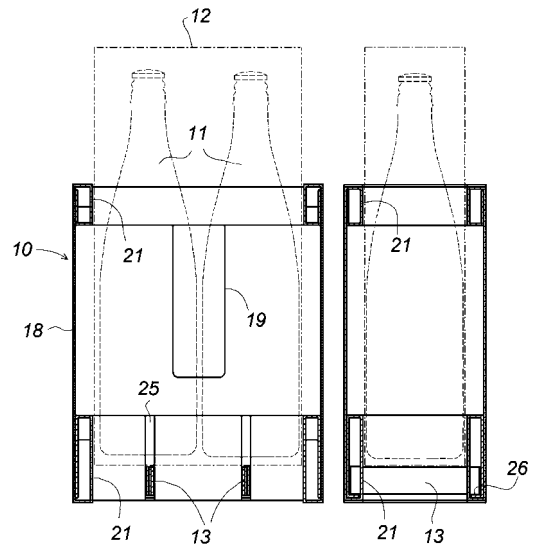
【図 2】



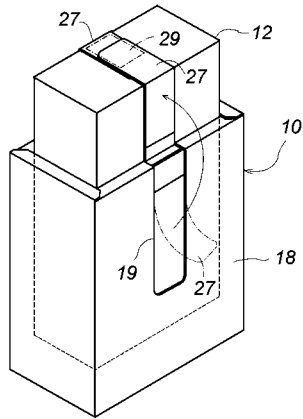
【図 3】



【図 4】



【 図 5 】



フロントページの続き

- (56)参考文献 特開平10-029626(JP,A)
特開2001-063763(JP,A)
実開昭51-047737(JP,U)
特開平10-139036(JP,A)
実開昭58-019912(JP,U)
特表平06-500064(JP,A)

(58)調査した分野(Int.Cl., DB名)

B65D 5/00

B65D 77/26